

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。一部、語句の改変があります。

（終戦直後、中学三年生の「ぼく」は、同級生らが戦争で被害を受けた工場の後始末に動員されるなか、病弱であるために数人の学生たちとともに学校に残されている。）

小学生や低学年生たちの授業時間に、ぼくはだから玄関^{げん}わきの小部屋からぬけ出し、屋上に出て、時々ひとりその平面に特大のマッチ箱のような形でとっ起した出入口の、それもやはり半分から上を黒くぬられている壁^{かべ}に、ボールをぶっつけて遊んだ。校舎は森閑^{かん}としていて、時として屋上にはりめぐらされた金あみの向うに、校庭で体操をしている幾組^{いくぐ}かのそう音や、軽いさけびや、霞町^{かすみ}の方から走ってくる小型の都電のきしんだような音響^{きやう}までが、アブクのようにうつろにかび上ってくる。人気のない平たんな白い石の砂ぼくのような静かな屋上に、ボールはポクンと壁にあたって、ぼくの足もとまで転がってかえってくる。……同じ音程でくりかえすきみょうなつぶやきに似たボールのひびきこそが、つまりはぼくの存在を確証する孤独^{こど}なこだまだった。そして、それは比かく的に青空のようないちいちずな気分になれる、ぼくの好きな遊びだった。「あせをかきたい」というしような動が起こるたびに、だからぼくはボールをにぎってひとり屋上にかげ上った。

壁には、ちょうどストライクのあたりに、黒いしみがあつた。ぼくはそこを目がけて、投げる。——えい、打たしちまえ。レフト、バック。などつぶやきつつ、一人でカウントを取り、ぼくはそうして六大学のリーグ戦を挙行したのだ。無意識のうちに手加減をしてしまうのか、どうしても母校の慶應^{けいおう}は負けなかった。ぼくは熱心に敵方のときも大まじめで投げているので、それが不思議でなかったが、それでも相手方をスコ^{注一}ンクにおさえたときの気分は、なんとも言えないほどうれしかった。

屋上には、たいていあらい風がひとりで威丈高^{威丈高}にかけめぐっていたが、閑静でもあったし、晴れた日には日当

りが良かった。だれ一人あらわれない授業時間に、ぼくがそこで過す時間は多くなった。秘密の、そこはぼくのホーム・グラウンドであり、ぼくはその壁の直角になったすみに背をもたせて本を読んだり、弁当をたべたりもした。——同僚はたいいてい白米のキッチリつまったごうかな弁当をひろげていたが、ぼくのはたいいていフスマのパンか、粟飯のバラバラなのを防ぐためにそれをオニギリにしたやつであった。ぼくはがまんして、ひとり、たいてい五時間目の終わるころに食べた。さもないと帰りの汽車の中で目が回るほど空腹になるのだった。しかし、ぼくは元気だった。……その日の分の一冊を読み終えたときなど、ぼくははげしい速度感をためてみたい健康へのウズウズした気持ちにまけて、ひと人居ないのを幸いに、一人でくるったようにさげびながら、屋上を疾走してまわったりする。なにか、それでも物足りはしない。全身全霊をうちこんで、という表現がピッタリするよな感覚に、たしかに、いつもぼくはかわいていた。

問四

年が変わっても、同級生らの動員はいっこう解除されなかった。自然ぼくは居残りの一員としての毎日をつづけなければならなかったが、ぼくにはそれはかえって好都合とも思えた。リーグ戦が、あと三ゲムほど残っていたのだ。

一月の中旬がすぎるところ、あと残された試合はワセダとの決勝戦だけになった。

よく晴れた午後であった。その日いっしょに挙行するはずのリーグ戦の閉幕式の考えに夢中になって、ぼくが弁当とボールとをもって階段をかけ上ると、屋上の金あみに幽霊のような姿勢で両手の指をつっこんだまま、広尾方面の焼あとをじっと見下している一人の先客の背が目に入った。山口であった。「若き血」の口笛をふいていたことに、ぼくは秘事を暴かれたような羞恥を平手打ちのようにかんじて、口をとがらせて立止った。

問五

不愉快ははなはだしかった。だが、今さら階下へおりて、同僚の不健康な口臭や、無気力でしみったれた笑いや、「年ごろ」の会話を手つきたくみにコネまわしている暗い物置のような詰所で、同じようなくすんだ仏頂面

をならべてだまりこくる気分、とうていもどりはなかった。ぼくはボールをポケットにねじこみ、再び応援歌の口笛をふき鳴らしつつ、屋上の中央へと歩みはじめた。

ぼくと同様、山口もちょっとふりむいただけでぼくを黙殺した。黒い手編みの丸首のセーターが、うすっぺらな学生服のえりからはみ出し、色白な秀才タイプの彼の首を、よけいか細く繊弱に見せていた。ゲートルをつけてない彼の宮廷用ふうの細長いズボンの下には、ふつりあいなほど巨大な、重たそうな赤いぶた皮の編上靴がならんでいた。

ぼくは山口の向うをむいたかたくなな背に、ある敵がい心をかんだ。彼に目もくれず、ぼくは一人で壁に向って早慶戦をはじめた。真向からふきつけてくる青く透きとおった風にむかって、おこったように力いっぱい投げつけた。……彼を無視する強さを、ぼくはかく得しようとしたのだ。

山口は何も言わず、そうかと言って下りて行くでも散歩するでもなく、ただじっと金あみごしの下界をながめつづけている。しかし、ぼくは次第に、その彼の不動の存在を忘れて、早慶戦に熱中しだしていた。

問六 四対零。慶應のリードで三回は終わった。さあ。飯をたべよう。

ふりかえって、ぼくはぼくの強さの確認と、専心していたスポーツに一段落のついたそう快で無心な気分から、ほがらかに山口を見て笑った。すると、彼は意外にも、ぐう然ぼくと目を合わせたのを恥じるように、軽い雲影がうつるような、無気力な微笑をうかべた。……彼のそんな笑顔なんて、ぼくには初めての経験であった。その笑顔には、秘密のわかち合いめいたものが、力無くではあったが、ふくまれていたのだ。——友人になれる。そんなむじやきな直観が、ぼくを陽気にした。拾った弁当箱を片手に、ぼくは山口のほうに近寄ろうとした。

問七

そのとき、弱弱しく視線を落した山口の目が、ぼくの弁当にふれると、急にそれをすべりぬけて流れた。はっと、はじめてぼくはあることに気づいた。そうだ。彼はいつも昼食をたべてないのだ。——昼休みのほじまるころに

なると、彼はいつでもスーッと部屋を出て行ってしまう。何の気なしにその姿勢をおぼえていながら、その理由

にいままで気づかなかったぼくは、なんてバカだ。――だが、果していま、彼に弁当を半分すすめたものだろうか？

問九 実を言えば、そのときぼくをちゅうちょさせたものは、外ならぬぼく自身の空腹を想像したことではなかった。そんなことはぼくの頭に、そのしゅん間はなかったのだ。それは、恥ずかしいことだが、善いことをするとき、あの後ろめたさだった。

つづいて、ぼくに弁当をわたすために昼食をぬいている、母へのざい悪がはじまる予感が来た。おそらくこれは習慣になってしまっただろう……。すると、帰途の汽車の中での、あの痛みに似たセツない空腹、そして空ききって痛みもなにもなくなり、どこにも力の入れようのない立腹感からだ全体にただよいだしたような、あのその次の状態が、ぼくによみがえった。……だが、結局ぼくに弁当を分けることを止させたのは、神経質で孤高でプライドの強い山口が、ぼくのおし売りじみた親切に、そのまま虚心に応えっこないというおそれだった。――ぼくは思った。ぼくは一人で朗らかに、弁当を食おう。それはぼくの権利のフランクな主張であり、彼の矜持のフランクな尊敬である。あたりまえのことをするのに、あたりまえの態度でしょう。人間どうしのつき合いのうえには、決してふれてはいけぬ場所にふれることは、むしろ非礼である。……思いながら、ぼくの足はもう、彼の横にまでぼくを運んできてしまっていた。

「……あすこ、日当りがいいな。行こう」

それ以上何も言わずに、ぼくは晴れた冬の日がしずかにキラキラとたまっている、屋上のすみにあるいた。返事はなかったが、山口はおとなしくぼくにつづいてきた。へんに反こうして、見透かされたくないのだろうか。ぼくは彼の意外な素直さに、そう思った。

ぼくはだまっていた。彼もだまっていた。だまったまま弁当のふろしき包みを解いたとき、ぼくの腹がク、ル

ル、と鳴った。異様なきん張の気がゆるんで、ぼくは大声をあげて笑った。……それがいけなかった。アルマイトのふたをめくり、いつものとおり細いイカの丸煮二つと、粟の片手ニギリほどの六つがコソコソと片寄っている内味を見たとき、ぼくの舌は、ごく自然にぼくをうらぎってしまっていた。

「良かったら、食べろよ。半分」

山口はきみょうな微笑にほおをコワバらせて、首を横にふった。それは、意志的な拒否というより、首のすわらない赤ンぼうが見せるような、あの意味もなにもない反射的な重心の移動のように、ぼくの目にはうつった。

「食べなよ。いいんだ」

山口は振幅を心持大きくして、もう一回首をふった。こう着した微笑は消え、なにかウツケたような表情で、目を遠くの空へ放した。……激昂が、ぼくをおそった。先刻の思りよや後かいの予感も忘れ果てて、恥をかかされたように、ぼくの頭とはおに血がのぼった。

ぼくはくり返し低く、強く言った。

「ぼくは素直な気持で言ってるんだ。おせっかいなことくらい、わかってる。でも、腹が減ってるんだったらだめだ、食べなきゃ。……食べなきゃ……、食べたらいいだろ？ 食べたかったら」

言葉につまって、やっとぼくは興奮から身をはなすべきだと気づいた。ぼくはにぎり飯のひとつをとって、ほお張って横を向いた。もうどうにでもなれ、とさえ思った。こんなバカとは、ツキアイきんない。――そのとき、山口の手が、ごく素直な速さで、弁当箱にのびた。

「――ありがとう」と彼はぼくの目を見ないで言った。あり得ないことが起ったように、ぼくはひとみのすみで山口が食べるのをながめていた。一口で口に入れて、彼はわざとゆっくりとかんでいるようであった。

ある照レ臭サから、相手の目を見たくない気持はぼくにもあった。だまったまま、ぼくらは交互に弁当箱に手

をのぼした。当然の権利のように、彼はイカの丸煮も、ちゃんとひとつツマんだ。……じょじょにぼくはかれが傷つけられていないことに、またそうふるまってくれていることに、ある安どと信らいとをいただきはじめた。それは、最後に残った山口のぶんのひとつに、ちゅうちょなく彼のやせた手がのびたのを見届けたとき、ほとんど感謝にまで成長した。——ぼくは彼がけんかいなヒネクレた態度を固執せず、^{〔注6〕} 気持よくぼくに応えてくれたことがうれしかった。

ぼくと山口とは、それからというもの、毎日屋上を密会の場所と定めて、いつも弁当を半分コするようになった。

間十一

——ぼくらはどうしてわざわざ空ッ風のさむい屋上などを密会所に定めたのだろう。その小学校には、かなりひろい赤土の運動場も、動員で空ッぽになった教室もあったし、また、運動場のうしろのくすんだ濃緑の林におわれた小丘^{きゅう}には、秘密のあいびきには好適の場所がいくらでもあった。そしてさらにその向うには、ほとんどいつも人気のない草ぼうぼうのF邸^いのしき地が、なだらかにつづいていたのだ。

しかし、ぼくと山口とは、それから毎日、きまって午後の授業が始ったとき、別別の階段から屋上でおちあい、そこで昼食をとにしたのだった。屋上。——おそらくその最初のぐう然の場所をはなれなかったのは、その下界を見下ろして、自分と同じ高さにはただ空ばかりな空しいという位置に、地上の現実をきらうぼくと彼の趣味が、いっちしたことのせいではないだろうか。——雨の日など、ぼくらは屋上への階段の、てっぺんの一段に足をのせて、階下に向って並んでこしを下した。ぼくはそうしてわずかな食事をわけあうぼくと山口とに、まるで人目をしのぶどろぼうネズミどうしのような、みすばらしい友情がつながっているのをかんじる。……すべての人間たちを、自分らの足の下にかんじることが、せめてものその代償^{しやう}なのかもしれない。……す

間十二

しかしぼくは、山口とぼくの間を、それまでより親しいものにしようとは決して努めなかった。どちらかと

いえばぼくはすぐに無我夢中になりやすい人なつこい甘えんぼで、ザックバランな話相手は欲しかったのだが、山口が、食餌^{じじ}を提供される引きかえのように、そのぼくの態度をとることができたかった。だからぼくと山口とは、毎日弁当を二分するときだけ、それまでと別人のような親密な話をかわしながら、それ以外は全くそれまでの無関心で冷たんな表情でおし通した。それはまた、山口自身も望んでいたことであつたらしい。他の同僚たちと、ぼくは時時ピンポンなどをつき合ったが、彼は絶対にそんな仲間にも加わろうとはせず、そんな場所に顔を出すこともしない。詰所の陰気な空気^{いん}のなかで、ぼくと毎日一つ弁当の飯をくうことなど忘れ果てたような顔で、そのくせ子供っぽいびんしょうな目をするどく光らせ、いつもほの白くだまりこくっている彼を見ると、ぼくは時時、彼はぼくとの間に無言で協定したおしばいじみた約束を、内心たのしんでいるのではないかと思つた。彼も無為な日常にたいくつして、そんな遊びを必要としているのではないかと思つた。

間十四

青カビの色をした表紙の微積分の本に目を落としていたり、またさも人人がうるさそうに新聞で顔をかくしてねむっていたりしている山口を見ると、ぼくはよく子供ぎらいの年寄りを連想した。彼の動作にはそんな片意地なエネルギーのないにおいがした。

(山川方夫「煙突」)

〈注1〉ゼロ点で負けること

〈注2〉小麦をひいたときにできる種皮のくず

〈注3〉足首からひざまでまきつけて使う細長い布

〈注4〉気持をかくさず言動をかざらないようす。率直であるようす

〈注5〉自分の力や才能などを信じて持つほこり

〈注6〉がんこで自分の意志を曲げず人と仲良くしないこと

問一 ―― 部ア・イの言葉の使い方として正しいものをそれぞれ選びなさい。

ア うつろに

- 1 暗かった町なみが日の出をむかえて少しずつうつろにかがやき出してきた
- 2 心配事がかかえているA君は、授業中に窓の外をうつろにながめていた
- 3 早春の公園ではうつろにかおっているウメの花をたくさんの人々が楽しんでいる
- 4 友だちの誕生祝いは何にするかと、子どもたちがうつろにささやき合っている

イ 威丈高に

- 1 テニスの試合で優勝したA君は、大喜びで表しよう台に上がり、威丈高に手をふった
- 2 Bさんは、転んで泣いている妹を急いで助け起こそうと、威丈高に手をさしのべた
- 3 集合写真に写ったCさんは、列のいちばん後ろで威丈高になってほほえんでいた
- 4 D君は、連日の野球の練習でつかれ果てた部員を休ませず、威丈高に命令を下した

問二 ―― 部「秘密の、そこはぼくのホーム・グラウンドであり」とありますが、わかりやすく言うと、「ぼく」にとってどのような場所ですか。

- 1 ずっと自分の心の中だけで大切にしてきた、思い出がたくさんあった場所
- 2 自分以外にはだれも訪れる人がいないので、じっと静かにしていられる場所
- 3 他のだれにも知られず、自分がいちばん自分らしくいられる場所
- 4 自分しかまだ見つけておらず、しかもだれにも教えたくない場所

問三 ―― 部「全身全霊をうちこんで、という表現がピッタリするような感覚に、たしかに、いつもぼくはかわいていた」とありますが、「ぼく」はどのようなことを求めているのですか。

- 1 心も体も健康で毎日の生活がじゅう実し、何の心配もなく自分のしたいことに熱中できること
- 2 他の仲間たちといっしょに精一ぱい勉強して、社会の役に立つような人間に成長すること
- 3 体がじょうぶでなくても、せめて気持には張りがあって、毎日好きなことをして楽しく過ごすこと
- 4 落ちこみがちな自分の気持を奮い立たせて、一流の野球選手になるために練習にはげむこと

問四 ―― 部「自然ぼくは居残りの一員としての毎日をつづけなければならなかった」とありますが、「ぼく」の目から見ると、他の「居残り」の人たちはどのようなように見えますか。二十字以内で書きなさい。

問五 ―― 部「ぼくは秘事を暴かれたような羞恥を平手打ちのようにかんじて」とはどのようなことですか。

- 1 自分だけの楽しい空想の世界にとつ然よそ者が入ってきて、自尊心が傷つけられたこと
- 2 今までだれにも言っていなかった将来の夢をとつ然他人に知られ、非常に困わくしたこと
- 3 ふだん見せていない自分のおどけた一面をうっかり人に見せてしまい、自分でもおどろいたこと
- 4 警戒心解いた自分の姿を他人の前にさらけ出したことに気づき、精神的な痛手を受けたこと

問六 ―― 部「ふりかえって、ぼくはぼくの強さの確認と」とありますが、「ぼくの強さ」とは具体的にどのようなことですか。文章中の言葉を用いて書きなさい。

問七

——部「その笑顔には、秘密のわかち合いめいたものが、力無くではあったが、ふくまれていたのだ。友人になれる」とありますが、「友人になれる」と思ったのはなぜですか」

1 人目をぬすんで屋上で過ごしているぼくの秘密を知っても何も言わず静かに笑顔を見せた山口なら、ぼくの秘密をすべてわかってくれると確信したから

2 秘密にしていたはずの素のままの自分を見せてしまったぼくを、やはり秘密をかかえているらしい山口が受け入れてくれたように感じたから

3 病弱な仲間たちに調子を合わせていつも陰うつな顔しか見えなかった山口が、本当は気のやさしい素直な一面を持ち合わせていると気づいたから

4 それまで高圧的な態度でぼくを見下していた山口がぼくのかくれた運動能力の高さを認めたことで、山口よりも優位な立場になれたような気がしたから

問八

——部「何の気なしにその姿勢をおぼえていながら、その理由にいままで気づかなかったぼくは、なんてバカだ」とありますが、「その理由」とはどのようなことですか。簡単に書きなさい。

問九

「」部「実を言えば、むしろ非礼である」の部分にあらわれている「ぼく」の「山口」に対する気持としてふさわしいものを選びなさい。

1 山口に弁当をすすめることで、かえって彼がより空腹を感じることがないようにしよう

2 無理に仲間に引き入れるようなことをして、孤独を愛する山口の世界をふみにじらないようにしよう

3 繊細ではこり高い山口に不用意に弁当をすすめて、彼を傷つけないようにしよう

4 気難しい山口にひとりよがりな言葉をかけて、友情をこわすことがないようにしよう

問十

——部「……激昂が、ぼくをおそった。先刻の思りよや後かいの予感も忘れ果てて、恥をかかされたように、ぼくの頭とおに血がのぼった」のはなぜですか」

1 一度は心が通い合ったように感じた山口が、再びぼくをこぼんだように感じられたから

2 せっかく気をつかってやっているのに、山口がぼくを見下すような態度をとったから

3 本気で心配して弁当をすすめているのに、山口がいつまでもすねているように思われたから

4 素直にぼくについてきた山口が、今になってぐずぐずした態度に変わったから

問十一

——部「——ぼくらはどうしてわざわざ空ッ風のさむい屋上などを密会所に定めたのだろう」とありますが、「ぼく」はその理由をどのように推測していますか。一文でぬき出し、最初と最後の五字を書きなさい。

問十二 — 部「……すべての人間たちを、自分らの足の下に感じるものが、せめてものその代償なのかもしれなかった」とは、わかりやすく言うところのどのようなことですか。

1 病弱であるため仲間といっしょに働けずみなから白い目で見られているという共通点を持った「ぼくと山口」は、現実のすべての人間たちを足の下に見下すことによって、働くことができない後ろめたさを解消しようとしているということ

2 貧しくて満足に食事をとることができないという共通点を持った「ぼくと山口」は、現実のすべての人間たちを足の下に見下すことによって、貧しい者どうし逆境に負けず強く生きてゆこうとはげましているということ

3 野球選手になることをひそかに目ざしているという共通点を持った「ぼくと山口」は、現実のすべての人間たちを足の下に見下すことによって、だれよりも強い選手になることをちかい合っているということ

4 地上の生活になじめずに現実からにげているという共通点を持った「ぼくと山口」は、現実のすべての人間たちを足の下に見下すことによって、かろうじて自分たちのみじめさを受け入れることができるということ

問十三 — 部「ぼくは、山口とぼくの間を、それまでより親しいものにしようとは決して努めなかった」とありますが、なぜですか。

1 一つの弁当を分け合うという行為なしに、山口と親しい関係を保てる自信がもてなかったから

2 ぼくと山口が親しくなればなるほど食事を分け合うのが当たり前になり、山口が感謝しなくなるから

3 食事をもらうために山口がぼくに親しげにふるまうような、対等でない関係になるのがいやだったから

4 山口が食事以外のこともぼくにたよるようになったら、ぼくの負担が大きくなりすぎるから

問十四 — 部「無言で協定したおしばいじみた約束」を具体的に表している一文を本文中からぬき出し、最初と最後の五字を書きなさい。

問十五 「ぼくと山口」の友情について、あなたが思ったことを百八十字以内で書きなさい。

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

フィールドワークという言葉がある。社会学では現地調査、野外調査と言ったりするが、基本は、何かを調べたい人が調べたい場所に出かけ、調べたい現実に入りこんだり、現実を観察したり、調べたい人からくわしく話を聞き取ったりする営みのことだ。

私の大学院時代、指導をしてくれた先生は「社会学者は野良仕事をしなければならぬ」と口ぐせのように言っていた。先生自身は調査に動く研究者ではなく、どちらかといえば理論志向だったので、現場に出て調査することへのあこがれや思いこみから、フィールドワークを「野良仕事」と語っていたのだろう。

いずれにせよ、社会学は世の中をなんらかの方法で調べ、その結果をもとに研究する営みだと私は考えている。もちろん、調べ方は多様で、その対象となる現実や問題に合わせなければならぬし、これが一番という方法はない。

フィールドワークというと、人類学を連想する人も多いだろう。現に、人類学のテキストには、必ずフィールドワークという言葉が登場する。人類学誕生の経緯を考えれば、それは当然といえるかもしれない。たとえばイギリスが世界中に植民地を増やし、帝国としてはん栄していた時代、多くの異なる民族を統治支配するために、それぞれの土地で暮らす人びとの生活や文化を知る必要があった。結果的にはキリスト教や西欧文化が地元の宗

教や文化をはかいていったが、その過程でさまざまな未開の地を調べる知的実せんとして、人類学がかたちを整えていったのだ。

研究者が、ある土地へ出かけ、土地の人と同じように暮らすために、土地の言語や習慣を学ぶ。土地の人からすれば、研究者はまったくのよそ者という立場から、自分たちと言語や文化を共有し、それらをおびやかす危険性のない知り合いのよそ者へと変ぼうしていくのだろう。

研究者は、異なる言語や文化をもつ人びとが生活する場所へ出かけ、まずそれを学び、そのうえで、彼らが生きている文化や生活の特ちょうや問題などを論じる。

そのとき、すでに人類学のなかで議論されてきているように、フィールドワーカー自身の位置や立場性が問題となる。また、フィールドワーカー自身がそれまでに生きてきた文化や生活をめぐる価値や規はんなどと、調べている対象が、相互にどのように関連しているのかということも大きな問題となる。

問一

ア、人類学にせよ社会学にせよ、他者が生きている現実を調べようとするとき、客観的な調査方法を守りさえすれば、科学的な研究が可能だという信奉は、すでに明らかな幻想だということである。

調査研究する者が、自らが生活者として生きてきた歴史や、そこで使ってきた自明なるもの（常識的な知識や、さまざまな思いこみや決めつけをめぐる価値など）からまったく影響を受けないことはあり得ないし、自らの存在をあたかも透明人間のように消し去って、他者への影響が一さいないように、現実に入りこむことなどできない。

問三

フィールドワークする者にとって、自らの存在を透明にできるようなふへん的な方法などない。だから、自らの存在と調べようとする現実との関係性や相互の影響のありようを、研究の実せんのかで反省的にとらえ返していく作業は、必須であり、基本なのである。

こうした課題に関連し、フィールドワークにとって必須の要件がある。それは「つねに自分をできる限りオープンにしておくこと」だ。

目の前に展開する出来事、あるいは人びととの語りで感じ取る新たな何かなど、未知なるものに対して、フィールドワークする私を、つねに「あけておく」必要があるのだ。

問四

もちろん、これまで従って生きてきた規はんや大切だと思ふ価値からすれば、簡単に理解したり、承認したりすることができないような出来事もあるだろう。ふだんであれば、それは、「理解する必要のないもの」として、その時点で関係を断ったり、きりをとったりできるはずだ。しかし、フィールドワークには、そうした「常識的対応」はなじまないのである。

たとえば、ネットワーク組織論者である金子郁容は、かつてボランティアとは何かを論じ、その本質を「つねに自分の窓をあけておくこと」だと述べている（金子郁容『ボランティア——もうひとつの情報社会』岩波新書、一九九二年）。ただだれかのためにになりたい、貢献したいというだけでは、ボランティアは続かない。ボランティアをすることで、私が新たに何をすることができのかが大事だというのだ。

問二

つまり、ボランティアは無償の貢献ではあるが、同時にそれを実せんする私にとっても確実にプラスになり、よりよく生きていくうえでさまざまな寄与があるのだ。その意味で、ボランティアは他人のためではなく、自分のために行うとも言いかえられる。

私をつねに「あけておく」ことで、新たな、異なる空気が流れこんでくる。どんな空気かはわからない。新鮮でおどろきに満ちたものかもしれないし、よどんでにこったどうしようもないものかもしれない。しかしいずれにせよ、その空気を自分のなかにとりこみ、その意味を考えることを通して、私自身がさまざまなかたちに変容する可能性が広がっていくのである。

私をつねに「あけておく」ことは、私にとって新鮮でおどろきに満ちたことだろう。イそれは同時に、つねに未知の出来事にそうぐうし、どうすべきかをなやみ考えるというリスクを引きうけることでもあるのだ。

フィールドワークをすることは、ボランティアをすることではない。しかしフィールドワークは単に何かを調べることではなく、調べている私が、つねに変容し得る可能性をもつ営みなのである。

ところで、私たちは何を求め、何と出会いたいと思い、フィールドに出るのだろうか。

社会調査の決まりきった見方では、ある社会問題をめぐる仮説があり、その仮説を検証するために調査をするということになる。検証のために、精緻に設計された計量的手法で質問紙調査を行えば、確かめたいことに関連するデータは得られるだろう。まさに「確かめるための」調査が実施できるわけである。

しかし、ある人が生きてきた歴史や生活をその人から聞き取るという、生活史の「聞き取り」や、調査する者自身が調べたい現実に入りこみ、そこで「生きられている」人びとの現実を詳細に観察する「参与観察」など、いわゆる質的な調査では、問五フィールドにおいて、私たちが確かめたいと考える仮説より、はるかに豊じょうな意味に満ちた現実に出会うことになる。

そこで暮らしている人びとの姿を詳細に見つめ、生活や文化をめぐる語りにしっかり耳をかたむけるならば、自分がそれまで考え、想像していた人びとの暮らしや、彼らが生きていくさまざまな問題に対する解釈が、いかに平板で限定されたものであるのかが実感されるのだ。

その場に出かけ、人びとの暮らしや、人びとがさまざまな問題を生きる状況ようを参与観察したり、多様な人びとから暮らしをめぐる聞き取りをしたりすると、「人びとの知恵」としか言いようのないもの——そこで「生きられた」、人びとの日常をしっかり意味づけている暮らしの技法や人間関係をめぐる作法、共同体のちつ序を維持するために必要な規はんや価値、方法などに出会える。

言いかえれば、調査研究する私がそれまでに考えていたことを軽やかにこえていくような「生きられた知」と出会うことこそ、フィールドワークのだいごみなのである。

(好井裕明『違和感から始まる社会学』)

〈注〉危険

問一 部ア・イにあてはまるものをそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|------|---|-----|
| 1 | そこで | 2 | および | 3 | ところで | 4 | しかも |
| 5 | だから | 6 | しかし | 7 | あるいは | 8 | つまり |

問二 a・bの意味として正しいものを選びなさい。

a 無償

- | | | | |
|---|--------------------|---|---------------------|
| 1 | きわめて貴重で他にかえがきかないこと | 2 | 見返りとしてのお礼やお金がいらぬこと |
| 3 | 行動に個人的な目的や意図がないこと | 4 | 責任が重くて取り組むのが簡単でないこと |
- b だいごみ

- | | | | |
|---|--------------|---|-------------|
| 1 | 期待される良い結果や効果 | 2 | 物事の根本的な意味 |
| 3 | 本当の良さやおもしろさ | 4 | そのものだけにある長所 |

問三 — 部「自らの存在を透明にできる」とありますが、どのようなことですか。三十字以内で書きなさい。

問四

——部「フィールドワークする私を、つねに『あけておく』必要があるのだ」について答えなさい。

①ここという「あけておく」とはわかりやすいこととどのようなことですか。三十字以内で書きなさい。

②「あけておく」ことでどのようなことが起こりますか。文章中の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

問五

——部「フィールドにおいて、私たちが確かめたいと考える仮説より、はるかに豊じょうな意味に満ちた現実に出会うことになる」とありますが、「はるかに豊じょうな意味に満ちた現実」とは具体的にはどのようなものですか。八十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を書きなさい。

〔三〕次のA～Cの各文と文の組み立てが同じものをそれぞれ選びなさい。

A まっ白に雪をいただいた富士山が緑のおかの向こうに見える。

B 世界中の船が集まる横浜港^{はま}は、代表的な日本の港だ。

C 空には鳥の歌う声が響きわたり、地には虫の鳴く声がわき上がる。

1 去年の秋に私の植えた球根は赤いチューリップの球根だ。

2 夜明けの時間がしだいに早くなり、気温も少しずつ高くなってきた。

3 『源氏物語』は千年もの間多くの人によって読みつがれてきた。

〔四〕次の——部1～5のカタカナの部分の漢字で書きなさい。また——部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

まだ日¹がアサイ

配²りよをかく

見³学のジュンロ

エ⁴イキュウ不変

⁵ヒガンを達成する

⁶注ぐ

⁷工面する

⁸養生する

